

[学年・学校経営]

あたたかい学級集団を育む動物飼育を中核とした生活科の展開

－アルパカを学習材とした大型動物飼育の工夫－

吉越 良子*

1 はじめに

1学年の担任に決まった際に、私は「あたたかい学級集団」の育成に力を入れていきたいと考えた。私は、子どもたちが友達への良い接し方を考え、本音が出せる安心感と所属感のある集団を「あたたかい学級集団」として捉えることにし、学級満足度が高い学級づくりを目指した。これは、特別支援を要する子どもたちが通常の学級に多く在籍するようになり、まだ自己中心性が残る1年生の発達段階を考えると、友達とのかかわり方に困難を示す子どもたちが多いからである。

このような、「あたたかい学級集団」を育むために、生活科を中核としたカリキュラムを編成することにした。生活科の目標の趣旨に、「自立への基礎を養う」上で大切な「自分自身についてのイメージを深め、自分のよさや可能性に気づき、心身ともに健康でたくましい自己形成ができるようにする」ことの大切さと具体的な体験活動を通して学びを深めていく重要性が示されている。上越市においては、生活科において動物飼育の実践が多く行われてきている。動物飼育の意義は、動物に親しみ、世話をする中で、自分以外の相手を思いやる心を育み、豊かな人間形成の基盤を培うことができることである。また、感受性の強い児童期に、動物たちと直接触れ合うという体験を行うことによって、残忍な行為に対する批判的な価値観を形成する基盤が培われていく。そして、級友と一緒に世話をすることによって、お互いに気付いたことを話し合うことができる。そのことが、動物のためになることをしてあげようという思いやりの心を育てていくと期待されている。

私は、生活科において、子どもたちが、動物たちと直接触れ合う体験を通し、自己効力感を育むことによって、本音の交流を深めさせ、あたたかい学級集団づくりができるのではないかと考えた。

しかしながら、動物の大きさによって飼育のしやすさや子どもに与える影響などに違いがあることを、松澤（1997）が、実践課題としてまとめている。中・大型動物の飼育活動では、なかなか言うことを聞かない動物を協力して飼育することによる喜びや達成感を味わえる一方で、恐怖心を感じる子どもがまったくかかわることができずに、自己効力感を得ることができないこと、小型動物においては、多くの子どもたちが積極的なかかわりをもつことができる一方で、簡単にかかわれてしまうので友達と協力して飼育できたという実感がもてなかったことが報告されている。清水（2008）は、小型動物と中型動物の同時飼育を通して、自己効力感を高めるための活動の在り方について考察している。同時飼育により、中型動物に恐怖心を抱いている子どもは、小型動物の飼育活動で、自己効力感を高め、少しずつ中型動物にかかわれるようになったと報告している。

これらの先行研究から、動物飼育において、「アルパカ」を学習材として選定できないかと考えた。「アルパカ」は、大型動物でありながら、人間に恐怖心を与えることが少ないからである。アルパカは、攻撃する武器をまったくもたないので、人間に危害を加える恐れがない。特別支援が必要な子どもたちを含めたすべての子どもたちが安心して触れ合うことができる。ウマなどのようにパワーもないので、蹴られる心配も少ない。また、のんびりと穏やかなアルパカの性格は、心を落ち着かせ、深くつろぎをもたらしてくれる。アルパカの愛らしい姿に、子どもたちは魅了されるだろう。このような特性から、高齢者施設や障害者の授産施設などでも、全身のリハビリの目的としてアルパカが取り扱われている。そして、アルパカは寒さや雪に強く、四季を通じたかかわりが可能である。

学習活動の展開に当たっては、子どもたちの思いや願いを大切にしながら、一人一人の活動の広がりや束ねていく「振り返り」の時間を重視していく。振り返りの時間では、拡散していた子どもたちの活動や思考を収束し、方向づけていきたい。友達との情報交換の場を取り入れることで、アルパカへの気付きだけでなく、自分自身や友達の良さへの気付きへと広がっていきたいと考えた。

2 研究の目的

本研究では、アルパカを学習材として動物飼育を行う。動物へのかかわりを深めるとともに、活動の振り返りを大切

* 上越市立大手町小学校

にする。これらの手立てが、あたたかい学級集団の育成において有効であるかを明らかにする。

3 研究の方法

(1) 単元構想の工夫（図1）

単元を作成するにあたって、一人一人のアルパカへの思いや願いを交流する場を定期的に設定するようにした。アルパカが来た日から、1カ月ごとに「友達記念日」を計画した。この友達記念日は、アルパカに出会えたことを「お祝いする日」として設定した。日常の活動だけではできない、特別にしてあげたいことを考え、個々がじっくりとかかわることのできるイベントデーである。このような節目となる活動を設定することで、日常とは違った子どもの意識がうまれてくると考えた。また、これまでのかかわりを改めて振り返る子どもも出てくると考えた。事前の授業から、記念日の当日まで、アルパカにしてあげたいことを考え、進んでアルパカにかかわろうとする姿を期待した。また、友達記念日後には、個人で振り返るとともに、全体での振り返りの活動を取り入れる。このような、友達記念日の活動を繰り返すことで、アルパカに合わせたかかわりを考えていく姿を期待した。そして、動物に対する思いやりの気持ちを育てていきたいと考えた。

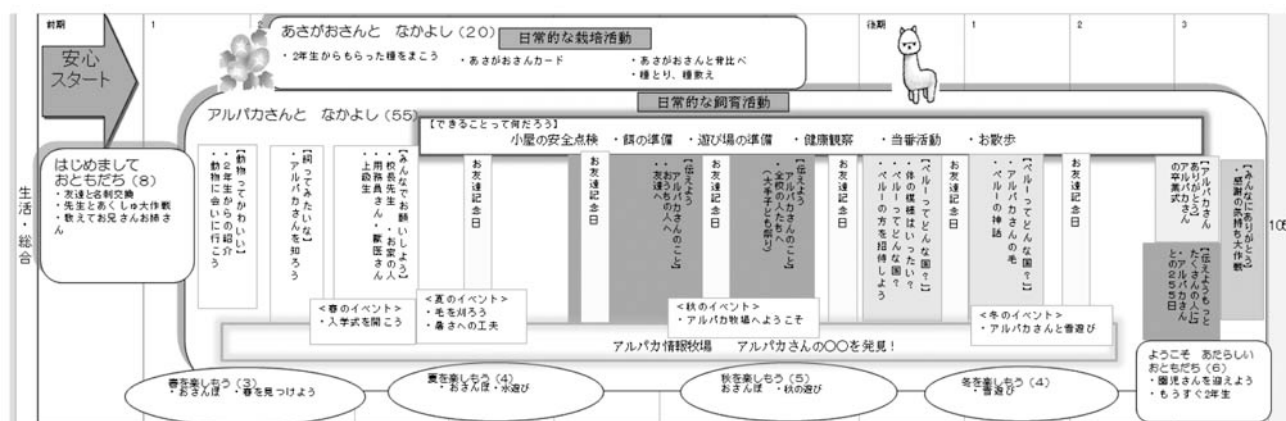


図1 生活科の年間指導計画

(2) 評価の方法

評価の方法として、子どもが思いや願いを実現しようと積極的に対象やそれを取り巻く環境にかかわろうとしていく姿、自分自身への気づきを深めていく姿を明らかにするために、活動ごとの作文シートの記述や発言から子どもの変容を捉える。

また、アルパカの飼育活動と定期的な振り返り活動が、あたたかい学級集団を育む上で有効かどうかを、Q-Uテストからも把握する。

4 研究の実際

(1) アルパカの学習材としての良さを活かす

① アルパカを飼いたいと願い、進んで話したり、調べたりする子ども

1年生の子どもたちから、「アルパカを飼いたい」と言ってくれるような展開にしたいと考えた。教師から与えられた動物で、教師から世話することを義務付けられた飼育活動であると、子どもたちの飼育活動への意欲は、大きく減退してしまうからである。そこで、次の3つの展開を考えた。一つ目は、入学したばかりの頃、2年生と一緒に学校探検をした中に、昨年度飼育していたヒツジ小屋に2年生から案内をしてもらうことである。ここで、1年生の子どもたちは、「1年生は、動物を飼うことができるんだね」「ぼくたちも、飼いたいな」という気持ちをもつ機会にできた。二つ目は、PTAの学年行事でたくさんの動物に触れあう機会を設けることである。実際に、山古志村のアルパカ牧場や長岡のファミリーランドに出かけた。実際に、動物を見たり触れ合ったりすることで、動物の愛らしさを感じたり、ぜひ飼ってみたいという気持ちを膨らませた。これをきっかけに、どの子どもも動物を飼いたいと願うようになった。その中でも、特に珍しく人懐っこいアルパカをぜひ飼ってみたいと教師や家族に気持ちを伝えてきた。三つ目は、飼育活動について、話し合う時間を設けたことである。それは、子どもたちが自分の素直な思いや願いを伝えることだけでなく、友達がどんな思いや願いをもっているのかを確かめながら、よりよい飼育活動の在り方を考えられるようにするためである。「動物がかわいいから飼いたい」「家では飼うことができないから飼ってみたい」「こわいし、うんちを触ることが嫌だ」など、みんなで伝え合い、友達の意見に耳を傾け、受け入れながら話し合いを進める子どもの姿が見られた。そして、この話し合い活動を続けてきたことによって、子どもたちは、「アルパカを飼いたい」と思いを一つにしていた。

② 願いを実現するために、問題に立ち向かい解決していく子ども

ア 簡単には飼うことができない状況をつくる

子どもたちは、アルパカを本当に飼うことができるのか、そのために準備しなければならにことは何かについて話し合ったり、調べたりしてきた。また、那須牧場から簡単に借りることができない状況の中で、那須牧場の代表者から次々と出される課題に対して一生懸命解決しようとしていた。このようにして、課題解決のために取り組んできた子どもたちは、那須牧場から承諾を得たとき、アルパカを飼えることを心から喜んだ。

6月末に、アルパカ2頭（あずきとぼたん）が学校にやってきた。1日の始まりは、アルパカに会いに行くことが日課となった。大勢が押し寄せることで、アルパカが離れていく様子を見ながら、自分たちに慣れてほしいと願い、優しく、驚かせないように柵の外から撫でたり、餌をあげたりした。また、大勢で押し寄せ、アルパカをびっくりさせないこと、人数を決めて入ることなど、ルールを自分たちで決めていった。

イ アルパカの変化に気付くことができるようにする

当番活動は、7月から5～6人のグループを作って、取り組み始めた。その頃から、朝の会の健康観察や国語の授業で行っているスピーチ活動の時間に、アルパカの様子について話したり、聞いたりする時間を設けた。夏休みに、糞に異常が見つかったことをきっかけに、「アルパカ情報ノート」を活用し、健康観察をノートに書き、次の当番に伝えるようにした。2学期の初め、「大勢が柵の中に入っても、アルパカが驚かなくなった」と子どもたちがアルパカの変化を捉えた。その理由を「一生懸命にお世話をしたから」「ぼくたちのことが優しいって分かったからじゃないかな」などと子どもなりに考え、自分たちのかかわりに応えてくれるアルパカに一層愛着を感じ始めた。

ウ 冬の飼育活動と遊びを充実させる

アルパカは、冬（雪や寒さ）に強い動物であることから、冬の遊びとも関連させながら活動をした。グラウンドの雪を利用して「アルパカ巨大迷路」の活動を展開し、友達と協力しながらアルパカが喜ぶ活動にしようと話し合ったり、考えたりしてきた。また、寒さや大雪にも負けず、アルパカのために進んで飼育活動に取り組んだ。夏や秋だけの飼育期間では体験することのできない活動を通して、子どもたちは試行錯誤しながら活動の楽しさを追究したり、アルパカのためにお世話を頑張りたいという気持ちをもったりした。そして、一層仲間との信頼感・連帯感をもつことができた。

③ 自分が体験してきたことを、自信をもって、発信する子ども

日々の飼育活動で、子どもたちは様々な気付きを担任に嬉しそうに報告した。そこで、国語科の「しらせたいな、見せたいな」という単元において、アルパカの秘密を探り、発見カードに書かためていくようにした。そして、自分の発見をたくさんの人に知ってもらいたいという気持ちが生まれ、書かためた発見カードの中から、お気に入りの一枚を選び、みんなに知らせるアルパカ情報牧場としてまとめた。作る過程で、アルパカ2頭には、それぞれ個性があり、まったく違った特徴をもっていることに気付いて行った。この気付きから、「あずきソング」や「ぼたんソング」を作る音楽の活動にも発展した。

子どもたちは、自分たちが発見したり、作ってきたりしたものを、多くの人に知ってもらいたいという願いをもつようになり、文化祭で地域の人や家の人を招いたり、縦割り班の上級生にも紹介したりすることになった。また、アルパカを見せてほしいという近隣の幼稚園や小学校からの依頼を受け、アルパカについて自信をもって紹介したり、友達とかかわったりしてきた。

(2) 定期的に行う単元「友達記念日」と「振り返り」を繰り返す

① 自分ができるようになったことを振り返る子ども

9/30（2回目の友達記念日の直後）のA子とK男の作文である。

きょうは、2かいめのともだちねん日でした。わたしは、りぼんづくりをしました。りぼんづくりは、ちょっとむずかしかったです。ほんとうは、一人で、きめたのに、おともだちが手伝ってくれました。わたしは、とってもうれしかったです。あと、きょうともだちきねんびがだいせいこうしました。また、ともだちきねんびがあるのでがんばります。あと、ぼたんくんとあずきくんのちかくできゅうしょくをたべました。きょうは、とってもふしぎだとおもいました。わたしは、ぼたんくんとあずきくみをみていると、きゅうしょくがはやくたべ終わりました。これが、ふしぎだったことです。(A子)

きょうは、2かいめのともだちきねん日でした。ぼくは、50めえとるそうをしました。ちょっとつかれたけど、もっとやりたかったです。あと、ぼたんくんもつかれたとおもいました。たのしかったです。あ、ぼくが、はじめてあずきくんとぼたんくんに、いっぱいさわりました。どっちもきもちよかったです。いっぱいさわれてうれしかったです。(K男)

A子は、日頃から「給食を最後まで、食べることができるようがんばりたい」と願っている子どもだった。友達記念日当日は、アルパカの小屋の近くで給食を食べている。りぼん作りは、自分一人で考えたことだけれど、りぼん作りをしていたら、友達が寄ってきて一緒に手伝ってくれたことが嬉しかったと綴っている。友達と一緒に活動できたことの交流感を抱いた。また、給食を最後まで食べることができたのはアルカがそばにいたからだの意味付けをし、アルパカへの愛着と自分ができた喜びを感じている。

K男は、日常の飼育活動の中で、「アルパカにたくさんさわりたい」という思いをもっていた。「先生、もっと時間が

ほしいな」と担任に気持ちを話すこともあった。友達記念日は、1時間たっぷりとかかわることができる活動だったので、K男は、いつもはできない50m走と一緒にやれたことの達成感とアルパカを思いやる気持ち、そして今までできなかったことができた充実感を綴っている。

② アルパカの立場に立って、見方やかかわり方を考えていった子ども

9/30（2回目の友達記念日直後）と10/1（事後の話し合いの後に書いた）S男の作文である。

9/30 きょうは、2かいめのともだちねん日でした。ぼくは、えさでやしそばをつくりました。たのしかったです。ちょっとちょうしにのりすぎでよっぱらっているかんじになりました。ぼたんくんたちはおいしそうにたべていました。やしそばをつくってよかったとおもいました。（S男）

10/1 いままで2かいともだちねん日をしました。やしそばをつくってよかったとおもうのは、おおまちがいだとおもいました。りゅうは、つぶこーんを（えさ）をつかいすぎたとおもうからです。こんどは、きをつけて、あるばかさんとあそびたいです。「ぼたんくん、あずきくん、ごめんね。」（S男）

S男は、アルパカが喜んでくれるようにと、朝と夕方に使っている粒餌と干し草をたくさん使い、やしそばのようにして、アルパカに与えていた。友達記念日の1日後のみんなで友達記念日を振り返る時間に、アルパカの体のことを心配するT男は、「やしそばづくりは、みんなも楽しくて、ぼたんくんもあずきくんも喜んでくれたけれど、太っちゃうよ」と発言した。自分がしたいことを記念日にしたことが、はたしてアルパカにとってどうなのかということを考える視点を与えた。アルパカに寄せる思いの質が、一歩高まる場面であった。S男は、2回目の友達記念日直後には調子に乗りすぎたと思いながらも、やしそばをアルパカに食べてもらってよかったと感想を述べている。しかし、話し合いを受け一変して、やしそばをつくったことを「おおまちがい」だと後悔している。これはT男の発言を受けて、アルパカの体のことを考えたからであろう。最後には「ぼたんくん、あずきくん、ごめんね」と締めくくっている。S男にとっては、「自分がしたいことを優先にする」段階から、「アルパカのことを考えてする」段階へと、アルパカを思う気持ちの質が明らかに変容し、高まっていった。

③ アルパカへのかかわり方を考える一方で、友達同士のかかわりについて考えを深める子ども

11/30（4回目の友達記念日直後）のE男の作文

4かいのともだちねん日で、ぼくは、きりふきであそびました。きりふきがつくえにかかっていなくて、いっぱいさがしました。でも、みつかったうれしかったです。きりふきをつかいたい人がいっぱいいました。ぼたんくんとあずきくんは、よろこんでくれなかったけれど、みんなよかったとおもってくれて、よかったです。「まあ、いっか。」（E男）

E男は、アルパカと霧吹きで霧で楽しもうと準備をしてきた。「テレビで、猿が霧吹きで霧を喜んでいたこと」「今は夏ではないので、シャワーだと寒いし、霧吹きなら喜んでくれるかもしれないから」という理由で準備をしてきた。アルパカとのかかわりの中では喜んでほらえなかったけれど、周りの友達が、霧吹きを使ってくれたこと、自分のアイデアを喜んでくれた嬉しさを綴っている。

12/1（5回目の友達記念日直後）のM子の作文

いままで、4かいめのともだちねん日をしてきました。はなしあい、わたしはみんながわたしのことをいっぱい聞いてくれたから、みんながともだちでよかったとおもいました。わたしは、あずきくんとはもうともだちになれているけれど、ぼたんくんには、けられてしまったので、ともだちになりたいんです。（M子）

M子は、2頭のアルパカのうち、1頭と友達になれていない、だから友達になりたいという思いをもち始めた。M子がぼたんの後ろで遊んでいたところ、アルパカを驚かせてしまった経験があったからだ。全体での話し合いを通して、M子に対して、「今度は、一緒にぼたんくんのところへ行こう」「Mちゃんは、ぼたんくんと友達になりたいって真剣に考えているからすごいよ」などと友達から励ましの言葉をもらった。話し合いを受けて、友達が自分のことを応援してくれて嬉しいという気持ちを作文に綴っている。

このように、「友達記念日」の活動を通して、子どもたちは、アルパカとのかかわり方を考える一方で、友達の行動に注目したり、友達同士とのかかわり方を考えたりするようになっていった。

④ 自分自身のこれからの在り方について考えていく子ども

2/10（別れの日を那須牧場の代表者から聞いた直後）のS男の作文

3月10日が、お別れの日になりました。はなしあいをしてぼくは、かなしくなりました。さいごのともだちねん日は、さいごのともだちねん日にしたいです。あと、しいくいんさんになりたいです。「がんばるぞ。」（S男）

3/10（別れの後）のE男の作文

きょう、とうとうおわかれになりました。ぼくは、わらいなきをしました。先生たちもいないでした。ぼくは、なぜわらいなきだったかという、男はなかないところの中に入っているからです。ぜったい、ぜったいわすれたくないし、ずっとともだちとぼくのころの中にはいっています。また、あえるとおもいます。らいねんの1ねんせいに、いのちのたいせつさとなかまのたいせつさをしてほしいです。りゆうは、なかまにはたいせつないのちがあり、ゆうきをもったり、ときにはけんかもするけれど、なかなかおりをし、ともだちといっしょにいきっていくのちがあることをぼくはしりました。あるばかさんだからこそ、いいおもいでがのこったことをぼくはうれしくおもうし、あるばかをかった日本はつの学校で、せいこうしてうれしいとおもいます。（E男）

別れの日を、一カ月前に那須牧場の代表者から子どもたちに伝えてもらった。借用期間は6月末から3月までということ、飼育する前から子どもたちは、約束をしていた。S男は、別れの期日を聞き、最後の友達記念日を大切にしたい思いと、将来アルパカの飼育員さんになりたいという夢を綴った。理由は、ぼたとあずきと一緒に生活ができるからだと言っていた。E男は、那須牧場に行けばまた会えることを期待している。S男やE男は、2頭のアルパカが那須牧場へ帰っても、その場所に会いに行くことができることを考え、これからも繋がっていきたいという願いをもった。そして、E男の言葉からは、アルパカや周りの友達と同じ命ある仲間として捉えていることが分かる。アルパカとともに生活してきた充実感を感じるとともに、日本で初めてアルパカを飼育した1年生であることを誇りに感じている。

5 考察

(1) 子どもの姿から見えた大型動物飼育における「アルパカ」の有効性

子どもたちは、アルパカの情報を集めなければいけない必要感にせまられた。これまで、小学校での飼育例がなく、ましてや近くにその動物のことを知る人たちがいない状況の中で、子どもたちは家族の協力を得ながら一生懸命に情報を集めた。出会いの設定で、子どもたちの自己決定を大切にしながら活動を進めてきたことが、動物飼育への意欲を高めた。

アルパカが学校にやってきた当初、1年生と同じくらいの背丈の高さであったため、アルパカに近づくことに躊躇していた子どもたちがいた。アルパカに対して暴力的にかかわる子どももいた。しかし、「わあ、ふわふわだよ」と嬉しそうに触れ合っている友達の様子を見て、触ってみようとするようになった。一方、暴力的にかかわっていた子どもは、アルパカが嫌がって逃げていく姿を目の当たりにして自分の行動を振り返るようになった。当番活動では、ドアの開け閉めや大きな餌箱を運ぶために、アルパカの様子を見ながらみんなで声をかけ合い、時には大人の助けを求めながら、みんなで協力していくことが当たり前になっていった。このように、恐怖心を抱くことなく、仲間と協力しながら飼育活動に励むようになった。

アルパカは、大きな瞳で子どもたちの活動をじっと見つめ、興味関心をもって子どもたちに近寄っていった。友達記念日の特別な日は、「アルパカに時代劇を見せてあげたい」（図2）「歌を聞かせてあげたい」「紙芝居を見せてあげたい」「サッカーを一緒にやりたい」などという子どもらしいアイデアによって活動が展開され、友達と楽しく準備をする様子が見られるようになった。このように、アルパカの特性である好奇心旺盛な性格によって、子どもたちはアルパカの反応を楽しみにするようになった。そして、面白いアイデアを発想し活動するようになった。



図2 子どもたちが考えた時代劇

(2) 学級の肯定感を高めた定期的な「振り返り」の効果

① 学級の雰囲気や穏やかで明るくなった

友達記念日の活動後においては、必ず、「個人振り返りの時間」と「全体でそれぞれの気持ちを共有する時間」を設定してきた。そのことによって、子どもたちは自分の行動を肯定的にとらえたり、時には見つめ直したりしながら、自分たちで、活動の意味付けを行っていった。「時代劇じっと見てくれたよ」「みんなでできて楽しかった」「自分がやったことが、アルパカにとってよかった」「次の友達記念日には、チケットを配って上級生を招待してみたい」などと、気持ちの交流をしてきたことによって、次の活動の方向性を見出していった。（図3）活動を繰り返すごとに、動物へのかかわり方だけでなく、友達とのかかわり方やみんなで活動するときのルールが学級内に共有され、定着していった。自己中心的だった子どもも、アルパカの立場になって考えたり、友達へのかかわり方も考えて行動したりするようになった。そして、友達記念日で感じた思いや願いは、日常の飼育活動にも波及していった。「ぼたと友達になりたい」と願うM子を休み時間に誘ってアルパカ小屋に出かける子、当番ではないけれど「一緒にやりたい」といって活動に加わる子どもである。よりよい活動をしていきたいという意欲が高まってきたことで、学級に一体感が感じられるようになってきた。



図3 全体での振り返りの板書

② Q-U アンケート調査の結果（図4，図5）

Q-Uアンケート調査では、学級全体の学級生活満足群の割合を学級生活満足群の全国平均41%を基に分析し、有意差を検討した。1回目の調査は、7月に実施し、学級生活満足群は32人中10人で31%だった。直接確率計算群（母比率不等）によると片側確率で $p=0.17$ であり、全国平均との有意差は見られなかった。2回目の調査は、3月に実施し、学級生活満足群は、全体の31人中19人で61%を示した。直接確率計算（母比率不等）によると片側確率で $p=0.03$ であり、全国平均を有意に上回った。2回の分析から、1回目のQ-Uテストから2回目のテストにかけて、全体的に学級生活満足群の割合が上がっている。

要因として考えられる一つ目は、月に一回実施してきた「友達記念日」の活動と「振り返りの活動」を大切にしてきたことである。活動後には、必ず、振り返りの時間を設け、自分の体験に意味付けをしてきた。活動の様子や感想を発表するだけでなく、前の活動と比較することで自分ができるようになったことも考えてきた。そのことが、自己効力感を少しずつ高めていった。M子（Q-Uテスト⑭）は、当初、要支援群のところだったが、友達記念日の活動を繰り返すごとに、アルパカや友達との関係性について振り返り、自分ができるようになってきたことを話そうになっていった。E男（Q-Uテスト⑥）は、さまざまな活動に消極的であったが、アルパカを飼育し始めてから主体的に活動するようになった。E男のおもしろいアイデアで学級が活気づいていった。当初は、要支援群にいたが、3月では学級満足群に入るようになった。二つ目は、子どもたちの行動に対してアルパカが反応してくれるので、子ども自身が「こうしてあげたい」「次はこんなことをしてあげたい」という願いや思いをもち続けながら活動を継続できたことである。三つ目は、アルパカを知らない人たちがたくさんいることで、発信意欲が高まったことである。近隣の小学校からの交流依頼、大手子ども祭り（文化祭）やなかよし活動（縦割り班での活動）では、これまでやってきたことを、自信をもって伝える場となった。四つ目は、夏から冬にかけて飼育活動を継続してきたことである。冬の飼育活動では友達同士の協力場面が多く見られた。小屋にたどり着くまでの雪かき、糞の始末や餌の準備は、友達がいないとできない状況にあった。また、冬の時期の友達記念日では、アルパカ大迷路をみんなで作ったり、小屋の中や外の雪かきに励んだりする様子が見られた。それらの活動を通して、友達の良さ、協力していくことの大切さについて、体験を通して実感することできた。

このように自己効力感を感じられるような活動を繰り返してきたことによって、学級の肯定感を高めていったと言える。その都度、友達や教師、上級生や家族、那須牧場の飼育員さんからの肯定的なフィードバックも、認められているという安心感へと繋がっていった要因だろう。

6 おわりに

今回の実践で、大型動物である「アルパカ」を学習材として選定したこと、定期的な活動として「友達記念日」を取り入れ、「振り返り活動」を続けてきたことが、あたたかい学級集団づくりにおいて有効であることが示された。特に、個人の振り返りだけでなく、全体で友達同士の思いや願いを共有してきたことが、個人の自覚をより深め、集団の肯定感を高めていった。今後も、あたたかい学級集団の形成における生活科の展開をより一層工夫していきたい。

＜引用参考文献＞

- 大西秀彦 『学校における望ましい動物飼育のあり方』 日本初等理科教育研究会，2000
- 清水憲子 『飼育活動を中核とした自己効力感を高める生活科の展開—小型動物と中型動物の同時飼育活動を通して—』 教育実践研究第18集，2008
- 新潟県上越市立大手町小学校 『人間力を育む教育課程の創造—ともに輝くとき—』 研究紀要，2008
- 野島聡子 『生活科における動物飼育の学習材としての有効性に関する一考察』 教育実践研究第15集，上越教育大学学校教育研究センター，2005
- 松澤ゆりか 『生活科における中型動物の学習材としての総合性に関する研究—第2学年におけるヒツジとヤギの飼育活動を通じて—』 教育実践研究第7集，上越教育大学学校教育研究センター，1997

Q-U アンケート調査からわかる学級の実態

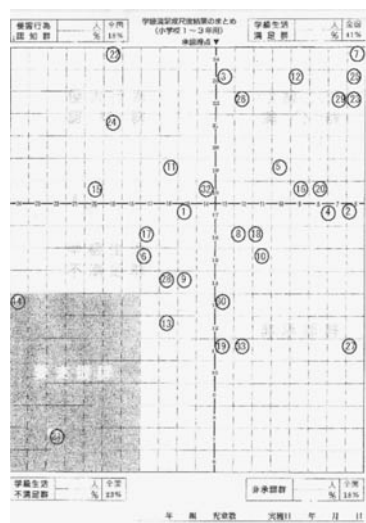


図4 学級満足度尺度 7月

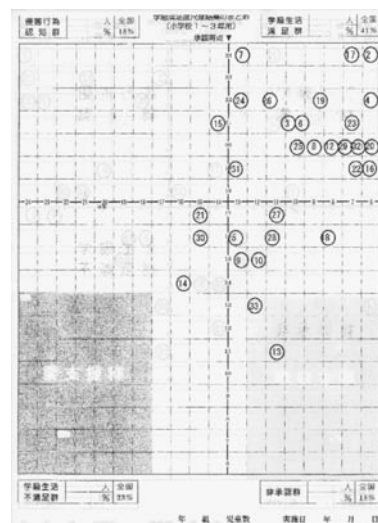


図5 学級満足度尺度 3月